

2019年度入学式 学長式辞

東京経済大学に入学された皆さん、おめでとうございます。本学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

本学は来年、創立120周年を迎えますが、今年は大倉高等商業学校・大倉経済専門学校から東京経済大学へと昇格してからちょうど70年という節目の年に当たります。大学昇格は学生、卒業生、教職員全員の悲願であり、学生による寄付金活動に象徴されるように全学の一致協力によって達成されたものでした。

それ以降、本学は他のどの大学よりも「大学らしい大学」となることを目標にして今日までやってきました。「大学らしい大学」の内容を一言で述べると、自由な学問研究を支えとして質の高い教育を行うことであり、この理念を透明性の高い大学の民主的運営によってしっかりと支えることです。

皆さんは、今日から「大学らしい大学」を目標に、何よりも学園の自由な雰囲気大切に守ってきた「自由の学府」東京経済大学で学ぶこととなります。確かな知識を身につけ学問の基礎を学ぶうえで正課の授業が大切です。同時に、皆さんの行動力、協調性と柔軟性、忍耐力と責任感を養ううえで課外活動も重要です。私は皆さんに心身を鍛える体育会系クラブや仲間とともに興味ある分野について打ち込める文化系サークルに参加されることを勧めます。クラブ、サークル、ゼミやクラスで友人をつくり、いろんなことを語り合ってください。「友との語らい」は皆さんの人間的広がり豊かさをつくります。

これに関して、最近一番私の印象に残ったのは、昨年11月のホームカミングデーでお会いした天野孝子さんと大久保まさ子さんのお話です。お二人は、昭和51年に本学に入学し、入学直後の部活の勧誘とともに珠算研究会に入り、それ以来ずっと変わらぬ友人として付き合っているそうです。天野さんが結婚して鹿児島に住むようになってからも、また大久保さんがイギリスのロンドンやアメリカのコネティカットで暮らしていた頃も何かと連絡を取り合い、行き来し、困ったときにはお互いに相談しながら大学時代からの友情を温めてきたそうです。皆さんもぜひ、このように本学のキャンパスで「生涯の友」を見つけて下さい。

ところで皆さん、大学とはどういうところだと思いますか。人によっていろんな見方があると思いますが、私は「大学とは学生と教師の出会いの場」であり、「学生と教師の語らいと切磋琢磨の場」であると考えています。

このことを皆さんにお伝えするため、今日は、本学卒業生の花房正義さん、

そして私が尊敬する経営者である京セラの創業者稲盛和夫さん、戦後日本を代表する思想家であり、私が若い頃に愛読した吉本隆明、この3人が大学時代にどのようにして「生涯の師」と仰ぐ人物に出会ったかについてお話しいたします。

最初に花房正義さんと山城章先生との出会いからお話しいたします。

花房さんは本学経済学部を昭和32年に卒業され、日立家電販売会社に入社されます。最終的には、日立キャピタルの社長・会長を務められ、その名経営者ぶりから「日立の青い鳥」と称されてきた皆さんの先輩です。

花房さんは、高校時代に画家を志望して岡山から上京してきましたが、絵の才能に限界を感じ方向転換を迫られ、本学への入学もやや挫折感を伴ったものでした。しかし、花房さんは、入学早々経営学者山城章先生の熱意あふれる講義をきき、大学で本気で経営学を学びたいと思うようになります。また、授業中での質問がきっかけとなって、高円寺の先生宅にも訪問するようになり、3年次からは山城ゼミに入ります。当時を振り返って花房さんは、「ゼミに積極的に参加し、先生との深い交流を通じて物事の原理・原則を身に付けることは、学生にとって最高の財産になる」と述べておられます。

この花房さんと山城先生の子弟関係が一般的な学生と教師の関係とは際立って異なっているところは、花房さんが卒業後もたびたび山城先生の教えを乞い、また山城先生をあらゆる側面で支えたことです。そして何よりも「経営は目的的思考でなくてはならず、目的的行為である」という山城経営学の原点を忠実に守り抜いたことです。花房さん率いる日立クレジットが他のノンバンクとは一線を画し、平成バブルの時代にも迷うことなく金融の社会的役割を明確に意識した優良企業へと発展しえたのは、山城経営学実践の賜物であり、さらにさかのぼれば、花房さんと山城先生の本学での出会いがもたらしたものといっていいいでしょう。

次は、京セラの創業者の稲盛和夫さんと内野正夫先生との出会いです。

稲盛さんの鹿児島大学工学部への入学もまた不本意なものでした。4年生のときの就職試験の結果もさんざんなもので、やっと内定した企業は京都にある碍子を製造する小さな会社でした。しかし、卒業の寸前に、不連続きの稲盛さんの人生に一筋の光が差します。それは、生涯の師となる内野先生との幸運な出会いです。

鹿児島の入来でとれる良質の粘土についての研究をまとめた「入来粘土の基礎的研究」という卒業論文がその年に鹿児島大学教授として赴任してきた内野先生の目にとまり、卒論の発表会の席で内野先生から「私は多くの論文を読んできたが、これは東大生のよりすばらしい」と絶賛されます。高名な先生からのこの言葉は、実力はあるものの自信を失いかけていた青年稲盛和夫に大きな力と希望を与えたことは想像に難くありません。さらに、卒業式の謝恩会でも「あなたは将来、りっぱなエンジニアになりますよ」と声をか

けられ、その帰り道にお茶に誘われ、内野先生から「エンジニアとしての心構え」などをじっくりと聞く幸運に恵まれます。これが縁で内野正夫先生は稲盛さんにとって、いくたびかの人生の岐路で相談相手となる「生涯の心の師」となります。

この出会いは、深い学識と洞察力を備えた内野先生が、青年稲盛和夫のなかにダイヤモンドの原石を見出したケースと言い換えてもいいでしょう。

最後に、若いころに私が愛読した吉本隆明と数学者遠山啓との敗戦直後の東京工大での出会いについてお話しいたします。

敗戦の余燼がまだ醒めない1945年秋、「大学に入ったものの工場動員の連続で、まともな教育を受けていない。なんでもいいから講義をしてほしい。」という切実な学生の要望に応えなければという思いから、遠山啓は単位など一切なしの自主講義に乗り出します。

一方、富山県魚津の動員先の工場で敗戦にあい、東京に戻ってきたものの毎日が暗鬱で何もする気になれなかった吉本隆明は、校門傍の掲示板にある特別講義「量子論の数学的基礎」の貼り紙を偶然目にして、その自主講義に参列します。この講義こそ、学生吉本と恩師遠山啓との出会いの場であり、敗戦に打ちのめされ虚無的になっていた吉本が一度も欠かさずに最後まで聴講した唯一の講義でした。

後に当時を振り返り、吉本は「怠惰なくせに職人的な教授たちを馬鹿にしきったひとりの学生を何が惹きつけたのだろう」と問い、次のように答えています。

「つぎつぎに繰り広げられる抽象的な代数概念が、いままで思い込んでいた数学とまったく異なっていた驚異や興奮ももちろんあった。けれど、もっと大きいのは遠山さんの淡々とした口調の背後に感得されるひとつの〈精神の匂い〉のようなものの魅惑であった。ほかは空洞のようになった学校のその西日のあたる教場で、ああ、これが〈学問〉ということなのだ、とはじめて感じていた。」

あらゆるものを白眼視していた吉本も、この自主講義における遠山啓先生の穏やかな佇まいと凜とした学問精神のなかに、もう一度本気で生きてみようという微かな希望のようなものを見出します。

ここに教師と学生の幸福な出会いがあります。

教師の側には敗戦の打撃から起きあがれない若い学生たちの荒廃をどこかで支えなければならぬという使命感。他方、学生の側には講義を通じて知的な飢えを充たしたいという思いと同時に、日頃の研鑽を通じて蓄積した学問を自主講義というかたちで公開する気力と勇気をもった教師のなかに「大学や学問の本来の在り方」を見る若者の直感。この二つの思いが出会い、のちに遠山啓をして「率直にいうと、長い教師生活のなかで、そのときほど熱をこめて講義したことはなかったような気がする。」と回顧するようす

ばらしい教師と学生の出会い、たぐいまれな名講義が生まれました。

本日、三組の学生と教師との出会いについて述べてまいりました。いずれもすばらしい出会いであり、このような教師との出会いのなかで、学生は学ぶ意欲を、「よりよく生きるのだ」という意欲を、高めていきます。

皆さんのなかには、私が紹介した話は少し古いのではないかと思われる人がいるかもしれません。しかし、わたしはそうは思いません。何かを学びたいという学生の意欲、若い学生にこれだけは伝えなければという教師の使命感。この二つの魂の出会いこそ、大学教育の原点なのです。今日のような「大転換の時代」にあっては、まさにこのような原点が重要なのです。

どうか皆さん、「自由の学府」東京経済大学にて「生涯の師」を見つけて下さい。

2019年4月2日
東京経済大学学長 岡本英男